

僕らの手で

資料1

「そういえば、おまえの中学校ってさあ、体育祭に盆踊りやるんだって？」
仲良しのリョウにそう聞かれて、ユウジはちよっと下を向いて答えた。

「そうだよ。『里めぐり音頭』っていうんだ。」

ユウジは広島市近郊の市街地・府中町に住む中学一年生だ。幼なじみのリョウは引っ越して隣の中学校に行くようになったが、同じ町内に住んでいるので、今でも付き合いが続いている。

「それがさあ、聞いてくれよ。府中町に古くから伝わる踊りなんだってさ。いつときは踊る人がいなくなつて、すたれかけてたらしくて。それで、なんでか知らないけど、僕らがやることになったんだ。僕らの手で伝統を受け継ぐんだってさ。」

それを聞いてリョウは少し首をかしげた。

「そんな踊り、府中町にあったっけ？」

ユウジも苦笑いしながら答える。

「僕だって全然知らなかったよ。でも、歌詞とかにさ、みくまりとか、榎川とか、えのみやさんとか、いっぱい知つてるところが出てくるんだ。踊りや歌は、保存会のおじいさんたちが毎回教えに来てくれるんだけど、その踊りもけっこう難しいんだよ。何度も練習して、だいぶんできるようになったんだけどさ。」

「ふーん・・・ソーランなら激しいし、かつこいいけどなあ。里めぐり音頭かあ。なんか、古い踊りって感じだよな。」

「うん・・・ほんとこ毎日暑いしさあ・・・やってらんないよ。」

次の週もユウジの学校では、体育祭の練習が続いていた。

「今日も頑張ってくださいよ。」

保存会のおじいさんたちが、通り過ぎる生徒たちに、ニコニコと声をかけている。

「ヤートトセー！ ヤートトセー！」

ユウジは、みんなと一緒に頑張って大きく『合いの手』をいれながら扇子をまわし続けた。

「暑いなあ・・・」

ユウジはおおげさなため息をついてあたりを見わたした。ふと、後ろを振り向くと、一人のおじいさんが踊っていた。シャツがぐっしよりぬれている。落ちる汗もぬぐわず、声をはりあげて踊るおじいさんの姿に、ユウジは圧倒されてしまった。

夕方、ユウジはリョウと公園に行った。

「おれ・・・わかんなくってさあ・・・」

ユウジは、ためらいがちに話しかけた。

「何が？」

「おじいさん、なんであそこまで熱心にやるんだろうって思ってた・・・」

「好きなんだろう？ 『里めぐり音頭』って踊りが。それだけさ。」

(・・・)

目をそらしたユウジにかまわず、リョウはどんどん話してくる。

「そうそう、こないだの夜な、遅くなった帰りに田所神社の前を通ったんだ。そしたら、太鼓の音が聞こえてきてさ、これってユウジが言ってた『里めぐり音頭』か？ って思ってた、ちよつとのぞいてみたんだよ。そしたらさ、何人かのおじいさんたちが、なんか楽しそうに踊ってたよ。」

「楽しそう？」

「うん。・・・でも、ずいぶん小さい輪でさ、たったこれだけの人数でやってんのか？ って感じだったなあ。それにさ、よく見たら、若い人がぜんぜんいないんだよ。そこにいた、おじいさんたちが話してたのが聞こえたんだけどさ。」

・・・・・・『今度の盆踊りには、たくさん踊ってくれるとええがお。』

『じゃが、最近の人は踊りに来んねえ。』

『そうそう、会場に来とつても、踊りの輪に入ろうとはせんでしょう。』

『踊つとるのは、年寄りだけですよ・・・。』

『わしらがおらんようになったら、この踊りはどうなるんかいの・・・。』

『さみしいことよの・・・。』

ユウジはうつむいて、唇をかみしめた。

(今日も頑張ってくださいよ。)

みんなにニコニコと声をかけていた保存会のおじいさんたち。その笑顔の裏には、どんな思いがあったのだろう。小さな踊りの輪を想像してユウジは胸がいっぱいになった。

体育祭での「里めぐり音頭」本番。

「ヤートトセー！ ヤートトセー！」ユウジは思いをこめて声を張り上げた。踊りは大成功だった。踊りのあとには、あたたかい拍手が会場中にひびいた。退場するとき、保存会の人たちのいるテントをチラッとみたユウジは、満面の笑顔で拍手するおじいさんを見

つけた。大粒の汗をぬぐうユウジを、風がさわやかに通りぬけていく。ユウジは思わず心の中でガッツポーズをしていた。

次の日、ユウジはリヨウと図書館へ行った。行く途中、リヨウが後ろから声をかけてきた。

『里めぐり音頭』、どうだった？』

「うん。うまく踊れて気持ちよかったよ。」

ユウジは前を向いたまま、きっぱりと答えた。

「そっか。頑張ったんだな。」

「うん。でも、それだけじゃないんだ。」

ユウジは、振り向くとさわやかに笑った。

保存会の人のお話

資料3

○ 私は、この素朴な踊りが大好きなんです。府中の名所も、いっぱい出てくるしね。誰でも気軽に参加して踊れる素晴らしい踊りだと思うんです。

○ でも最近の人は、盆踊りにも行かんねえ。来とつても踊りの輪に入ろうとはせんでしょう。踊っとるのは年寄りだけです。さみしいことです。盆踊り自体がなくなった地域もありますよ。

○ 里めぐり音頭もね、わしらに踊りを教えてくれた人は、もうみーんな死んでしまつてます。わしらがいなくなれば、この府中の踊りは本当に途絶えてしまう。なんとかして残さにやいかん、と思いました。

○ だから、緑ヶ丘中学校が取り組んでくださるときいて、そりやあー、うれしかったですよ。よろしゅうお願いします、という気持ちでした。これで若い人にやってもらえる、という喜びでいっぱいでした。

○ 実は、去年歌を担当した子が今年の夏の盆踊りに来てくれたんですよ。そして一緒に歌ってくれたんです。非常にうれしかったですね。中学生の子も地域の子なんです。地域で生きとるんですよ。一人でもいいから、ああやって加わってくれる子が出たら、本当に嬉しいです。